

昭和20年、千葉県立大原高女卒業後、昭和22年、美容師、テレビメイク、ヘア、着付、美容室3店舗経営、昭和65年にリタイア。

おいらく行進曲

「墓石に近き恋は、おそるるにたるものなし！！」大歌人川田順が、昭和23年頃、教授夫人とおいらくの恋におちた時、いわしめた言葉である。時に66才。私80才、恋は向うの方へけ飛ばして、も早おそるるにたるものなしの年齢は、はるかに越えている。

息子は「恥が上着をきて歩いている」と言う。栄光も名誉も金もふり捨てた、産業廃き物の身では、何ものもおそるるに足るものなしなのであります。風はさえぎる物なき身の廻りを壮大に吹きまくり、空には果てしなく綿雲の流れるを追い、夜の星空をみては、その果たてにやがて訪れるであろう、あの時に思いをはせる。年老りは背中に背負った行燈だと言われる。薄ぼんやりした灯りで、過ぎ去った時をふり返れたら、物を言うと。何時も風通しのよい窓を開き、アンテナを高くしていたいものだ。古タイヤのゴムのように、弾力のなくなった感性にはなりたくない。最近友達が2人ばかり、浴室で亡くなった。居残っている友人達は、「風呂にお湯をいっぱい張らないで、おへそ位迄にして、しゃがんで入った方が良い。溺死しないですむから・・・」口々に言う。「いいじゃないの。自分で湯かんして、あっと言うまに死んでしまえば」

私は言う。スパゲティ、シンドロームの延命措置で、永生きなどしたくはないのだ。潔いよい死を選択したい。台所の床を拭いてた時、大きなゴキブリが、よろよろと出てきた。羽は破れ、私のことなぞ気にせず、目の前でホイホイの箱の中へ入って行った。まるで自分の死を選択するかのよう、堂々と入って行った。ホ

イホイはゴミ箱へ捨てず、庭の隅へ静かに埋めてやった。老いたゴキブリに感動したのだ。たまに東京へ出ると、娘が食事に誘ってくれる。「何を食いたい？」娘は聞く。「ステーキ。」房総の漁師町で鰯臭いものばかり食べていると、ハイオクのガソリンが入れなくなるのだ。都合の悪い時には、産業廃棄物の後期高齢者になり、自分勝手にクライスラー並みのエンジンだと凄む。ハイオクはその為にも必要な、燃料になる。

パンプキンポタージュ。シーサイドサラダ。ステーキ。マンゴープリン。チャイ。娘はオムライスにサラダ。「年老りと食事だから、2人で5千円もあればと思っていると、うちの年老りに限って大間違いだ。1万円でやっとお釣りだ。ブツブツブツ」娘はボヤク。戦争中、私達はお国の為。天皇陛下の為。敗戦後は会社の為、仕事の為。そして結婚しては、亭主の為。子供の為。運が悪ければ姑の為迄頑張ってきた。もう、何々の為は返上して、自分の為に一杯生きるのだ。余計なことにエネルギーを使うのは止める。不愉快な友人、無神経な隣人、小うるさい親戚、どうぞ、そういう方は其方で好きなようにやって下さい。私のように清く正しく、ウツクシイ人ばかりでは、テレビドラマは面白くない。「おしん」のドラマも出来ない。色々な人間模様であって良いのだ。今更、60年70年を信念もって生きてきた人。皆中に苔の生えてきた人に、ギア、チェンジを求めても無理なのだ。地平線の見えてきた夕映えの道に入っているのです。納得した人生。黙っていても存在感のある人間。

それが私の80年の、トーテムポールなのです。

うなそこ
湖底に沈みしごとき月の夜は
微かにきこゆあの足音が

はやぶさの如く翔とびたし梅雨明けの
籃らんじょう青の空吾を招きぬ